

『日本詩人』と萩原朔太郎

——「大正」詩を考えるために——

勝 原 晴 希

一

この二、三年、断続的に『日本詩人』（大正十年十月〜十五年十一月）を読んでいるのだが、そこに掲載されている詩作品や詩の批評を読むたびに、なんとももどかしい思いにとらわれる。分からないのではない、分かりすぎるのだ。「明治」の、たとえば薄田泣菫や蒲原有明のように、難解な言葉が使用されているわけではない。「昭和」の中原中也や伊東静雄のように、解きほぐすべき謎めいた世界が仕組まれているわけではない。読めばすらすらと読めてしまうのだが、そして個々にはそれなりの差異があり個性がありながら、全体としては妙にのっぺりとしていて、とらえどころのない同じような表情に見えてしまう。可もなく不可もなし、といった印象である。ただそれでも、分かりすぎるといふ分からなさを前に、あれこれと考えているうちに、少しずつ分かってきたことがある。たとえば、何でもよいのだが、千家元麿「鎌倉で」（『日本詩人』大正十二年六月）を例として取り上げよう。

今日太陽は大海を乾しあげてしまいい相な勢で熱して輝いてゐる
遥かに大島の噴煙が見へる

いつもは山の上に香爐の煙程のものが

一抹細く頂を離れもせずに巻きついて流れてゐるばかりなのが

此頃は籠のやうに天に沖してゐる

遠くから見ても、焰の渦巻きの鱗が見へるやうに

濛々と立ち登つて

巨大な頭を軽気球のやうに天際にたゞよはしてゐる

夜になつてもそのうす赤い焰が見へはしまいか

けれども今日は麗か

遥かの世界の出来事のやうに

私達は麗らかな島の噴煙を悠々と眺めて女や子供らと笑つて

春の日を楽しんだ

書き写しながら思わず、うとうととしてしまふやうな、引っ掛かるところのない作品である。もっとも、「今日太陽は大海を乾しあげてしまいい相な勢で熱して輝いてゐる」のでありながら、「今日は麗か」とはどういうことかと、引っ

掛かりはするが。北原白秋にならって行分けを廃すると、こうなる。

今日太陽は大海を乾しあげてしまいい相な勢で熱して輝いてゐる。遙かに大島の噴煙が見へる。いつもは山の上に香爐の煙程のものが、一抹細く頂を離れもせずに巻きついて流れてゐるばかりなのが、此頃は籠のやうに天に沖してゐる。遠くから見ても、焰の渦巻きの鱗が見へるやうに、濛々と立ち登つて、巨大な頭を軽気球のやうに天際にたゞよはしてゐる。夜になつてもそのうす赤い焰が見へはしまいか。けれども今日は麗かで、遙かの世界の出来事のやうに、私達は麗らかな島の噴煙を悠々と眺めて女や子供らと笑つて、春の日を楽しんだ。

小説の一節として読んで、それほど違和感を感じない。引っ掛かるところのないのは、小説一般の言葉の特徴である。大正期の詩が厄介であるのは、このように作品の言葉が小説の言葉と変わらないものになっているということが、意図せざる結果としてではなく、意図の実現としてあるということだ。大正期に口語自由詩は一般化した。知られてゐるやうに、北原白秋はこれに噛み付いた。口語自由詩とは、萩原朔太郎が正しく指摘してゐるやうに、詩の散文化に他ならない。

千家元麿「鎌倉で」について、尾崎喜八は「六月詩壇月評」（『日本詩人』大正十二年七月）で、次のやうに評している。

たとへ益々技巧的になつてゆく詩壇の大勢を此際いくら意識しても、此の作品の価値——その美、その酩酊の

深さ、ぶちまけられた詩的情緒の激刺さ——は毫末も傷けられない。(中略)その作品は悲しいまでに美しく、不思議な生氣にのみ打つて、しかも爽かな氣息が吹き渡つてゐる。彼は恵まれた詩人である。人は習練によつて彼に近づく事は出来ない。しかし今日の詩壇が千家元麿君を持つ事は、我国の芸術からぢかに榮養を摂りたいと願ふ私達にとつては悦びである。

本気で言ってるのか? と思うが、本気なのである。尾崎喜八は月評の冒頭に、「冷やかな指先」で弄くりまわすのではなく、「御座なりを云ふ」のではなく、「敏感と同情と、信念と精神と、心臓と魂とを持つて」と述べている。「本来の自分を匿さうか。否!」「度盛りを縮めるか。馬鹿な!」とも。それは「良心」が許さないと言う。彼は誠心誠意、作品を読む。そこに読み取られるのは「技巧」ではなく、詩人の人間性である。「人は習練によつて彼に近づく事は出来ない」と言い方は、アララギ派の歌人島木赤彦の「鍛練道」を想起させる。尾崎の月評をさらに見ていくと、林信一の作品について、「穏かな林君」「おとなしい君の心」「林君はやがて帰りつくべき本来の境地へ辿りつくにしては、余りひどい廻り道をしてゐる」とあり、中西悟堂の作品について、「あれ程しつかりした人物が」「中西君の本来の声を聴き得ない」「その道は君と云ふ人間を生かす道ではない」とある。「道」と言い、「境地」と言う。このような「人間」への注目、やがて昭和に入つて小林秀雄の「作家の顔」への注視に至るであろう。そしてそれはまた、戦後の近代文学研究の領域にも流れ込むだろう。

尾崎喜八も千家元麿も、(白秋らの脱退による分裂後の)「詩話会」/『日本詩人』の中心にいる詩人ではない。中心の詩人は『日本詩人』の編集に携わつた、白鳥省吾、福田正夫、百田宗治、(大震災を機に身を引くことになる)福士幸次

郎、「詩話会」の主唱者の一人である）川路柳虹、やや遅れて佐藤惣之助あたりだろう。千家元麿は詩話会の委員十名に名を列ねてはいるが、『日本詩人』の最終となった号に編集を予告されながら、そのままに終わったし、尾崎喜八は中心からさらに遠い。先の月評の冒頭に「何処かの会員の一人として、割り当てられた義務は果たさせねばならぬ」「私自身の作品に同感も同情も持たないやうな選ばれた人々に読まれない事」をせめて願うと書いているのが、尾崎の位置をよく物語っている。二人とも中心に位置する詩人ではないけれども、しかしその詩、詩評は、『日本詩人』の特徴をよく示している。

乙骨明夫「『詩話会』についての考察」（『百合女子大学研究紀要』第六号、一九七〇・十二）は、「『詩話会』／『日本詩人』と民衆詩派との関連を「大きく見すぎてはならない」としている。

要するに「日本詩人」は詩壇を広汎に展望した。白秋らの定型詩派をのがしているという点に偏向をみとめることはできるが、口語自由詩は「日本詩人」を待たなくても、当時の詩壇の主流になっていたのである。「日本詩人」が口語自由詩を主にのせたとしても、それは時代の流れから言って当然のことであった。したがって「日本詩人」を民衆詩派の機関誌であるかのように見なす考え方には賛成しえない。「日本詩人」にのせられた作品を見れば、その考え方が極端にすぎることがよくわかる。

民衆詩派が詩話会の動きを左右することはなかったと思われるし、またそのようなことは不可能であったと思われる。万一、民衆詩派が詩話会を左右することがあったとすれば、詩話会があのようにな大きな存在となること

はできなかつたであろう。詩話会は決して一党一派には偏しなかつた。途中で一部の脱落者を出しはしたけれども、詩壇を統合して、詩壇の社会的地位を向上させようという、詩話会成立当初の目標には一応到達することができたと思われる。

実際に『日本詩人』に目を通してみると、乙骨氏の指摘の妥当であることが知られる。もっともそこには「民衆詩派的色彩」「民衆詩派的傾向」（乙骨氏）が少なからず認められはする。そもそも詩話会分裂の「ことの起りは白秋耿之介諸君が福田正夫君らの、会に対する態度に怒りを発したため」であり、「平等を福田君らが少し濫用し、自分の友だちを無差別に詩話会へ加へたことが前記詩人の反感を買つた」「この為め詩話会は民衆派の牙城だといふ噂さが飛んだ」のだという（川路柳虹「詩話会のこと」「日本現代詩大系月報第九号、一九五一・十。乙骨論文による）。北原白秋が「考察の秋」で俎上に乗せて批判したのも、白鳥省吾、福田正夫の作品であつた。ではあるけれども、『日本詩人』は「民衆詩派の機関誌」でなかつたのはもちろん、民衆詩派が主導していたわけでもなく、努めて編集に公正を期そうとして、いることが誌面に観察される。

一一

ただここで注目したいのは、乙骨氏が「日本詩人」にはこのようにして一時期、民衆詩派的傾向が強まつたのであるが、この傾向は、要するに自由詩派全般の傾向であつた。自由詩は「日本詩人」の主流であり、また、当時の詩壇

全般の主流であったと思われる」と述べていることである。この考えは、萩原朔太郎「詩話会の解散に就いて」(『都新聞』一九二六・十・一五〜一七)の意見に、合致している。

所謂『詩話会派』は即ち「自由詩派」のことである。然るに最近までの詩壇的潮流は、殆んど概して我々の時代の継続であり、詩壇の大勢は吾人の近代自由主義を奉じて進んで居たから、所謂「詩話会派」はそれ自ら現詩壇の代表詩派を指すのであつた。しかして詩話会の詩壇的中心に團結する意義もまた此所にあつた。

朔太郎はそこに共通する「時代的特色」を「詩風のプロゼックなこと詩語の平明なこと、俗語的現実感を尊ぶこと等一言にして言へば詩の精神を近代的自由主義に置いたこと」とし、「けだし之れは、前代詩壇の所謂象徴詩が、概して古典的、雅文的、形式的のクラシズムを精神としたに対し、その反動として現はれた必然の潮流であつた」としている。「詩風のプロゼックなこと詩語の平明なこと、俗語的現実感」というのは要するに、口語自由詩を指していることになるが、その口語自由詩を必要とした「詩の精神」は「近代的自由主義」にあつたと、朔太郎は主張している。そして「詩話会は、今や近代自由主義への反動期に入つて」「優勢なる反近代主義、反自由主義の古典的精神が新興してきた」と、詩話会の解散を事後的に承認している。この朔太郎の意見には、耳を傾けるべきものがあると思われる。

飛高隆夫「日本詩人」一面(『日本の詩雑誌』一九九五・五、有精堂)は、工藤信彦「民衆」と民衆詩派(『講座日本現代詩史2大正期』一九七三・十二、右文書院)に拠りつつ、「日本詩人」が創刊された時、民衆詩派は、すでにその最盛

期を過ぎ、その名は残されたまま、実体は変質し始めていたのではないか」として、白鳥省吾『現代詩の研究』（一九二四・九、新潮社）の要約する民衆詩派の特徴——「一、現実に対する情熱をもち同時に未来へ飛躍する肯定的な精神。二、着実なる現実味、ひいてはこれまでの詩人が気づかなかつたあらゆる人間、あらゆる事物に詩を見いだす取材の広汎。三、言葉の自由で平明であること。」——を引いて、「その初めから、民衆詩派詩人たちの現実把握は観念的であった。その「現実」が「日常」とすり変わりつつあった」としている。飛高氏はそれ以上の具体的な説明をしていないのだが、この、「現実」が「日常」とすり変わりつつあった、という指摘に注目したい。「詩話会」／『日本詩人』を中心とする「大正」の詩は、朔太郎の言う「近代的自由主義」と飛高氏の言う「日常」との中間に位置するというのが、現在のところのわたしの見通しである。

千家元麿の詩および尾崎喜八の詩評に戻ろう。両者ともに民衆詩派ではないが、白鳥の要約をさらに要約して、現実への情熱と未来への肯定、着実なる現実味と取材の広汎、言葉の自由と平明を、それらはほぼ満たしているかと思われる。この詩に語られ、また詩評に捉えられている「人間」を今、「民衆」と呼ぶとして、「大正」期の詩は、そのような意味での「民衆」詩であった、そしてその「民衆」が「大衆」に変質することによって、「大正」期の詩は終わった、というのが、今一つのわたしの見通しである。「大衆」に取り残された「民衆」は、たとえば尾崎方哉や種田山頭火のように「放浪」することになるだろう。

尾崎喜八は先の詩評で、福田正夫の作品も取り上げている。

「洩れ日」は題材も感情も表現も極く素直なので、いつもと違って静かに味へた。

この一篇は福田君のやさしい率直な性情をよく現してゐる。最後の聯の

小鳥は輝かしくうたふ、

空はうすい光の影に溶けて、

水車のつらゝは陽に燦然と光る、

少女の顔が窓から覗いて、

うれしさうな子供の声がひびく、

(陽が出たよ、陽が出たよ)

とちこめられた胸の底で、

新鮮な呼吸がほつほつと甦る。

は優しい。この方が、いつもの民衆的テーマより幾ら福田君だか知れない。たゞ此の一篇の中にさへも(これは廃村の風景ではないか)とか、「埋もれてゐる人生の廃頽」とか書いてゐるのは、却つて効果を減らす所以だと思ふ。そんな説明が無くても既に出るものは出てゐるのだ。

尾崎の福田正夫に対する構えが、如実に現れている評である。わたしが先に言った「民衆」とは、「いつもの民衆的主題」におけるような作品に描かれる民衆ではなく、たとえばこの作品で、雨上りの鳥の歌と陽光、嬉しげな子供の声に回復感を味わっているへ私Vを指している。このようなへ私Vはたぶん、「大正」期にならなければ詩に現れることはなかった。それは朔太郎の言う「近代적自由主義」を背景にしている。と同時に、すでにこの作品にも、そして

先の千家元麿の詩にも、「日常」が顔を覗かせている。「現実」が「日常」とすり変わりつつあった、という飛高氏の言葉を、わたしはそのように理解している。(これは廃村の風景ではないか)とか、「埋もれてゐる人生の廃頽」とかの言葉にこだわる尾崎喜八は、民衆詩のイデオロギー性を脱色しようとしている。言い換えれば、民衆詩のあからさまな主義主張を取り除いたところに成立する「民衆」詩こそが、「大正」期の詩の主流であるに他ならない。その意味で、「詩話会」／『日本詩人』の中心に民衆詩派を見ることは、必ずしも不当であるとは言えないだろう。

冒頭に述べた「もどかしい思い」は、ここに発する。見られるように、千家元麿の詩も部分引用された福田正夫の作品も、読むことにまったく抵抗を生じさせない。今日でもこのような詩を見かけることが、ないでもない。と言うより、「大正」期に、現在にまで至る詩の基盤が形成されている。口語自由詩の時代は、まだつづいているのである。そこにはアララギが今日の短歌の基盤を、そしてホトトギスが俳句の基盤を形成していることと(「基盤」であって「前線」ではない。ちなみに「前線」もまた「大正」期に成立した言葉である)、同一の事情がある。尾崎の言うように千家元麿の詩に「酩酊の深さ」「悲しいまでの美しさ」を感じ取ることは、出来ないわけではない。福田正夫の作品に、雨上りの新鮮な空気の匂いを嗅ぐことは、さらに容易である。そしてそのためにはむしろ、行分けを廃した散文形式にした方が、よい。というのも、そのように享受するためには、あるコンテキストが必要であり、コンテキストにしたがって作品の言葉は抵抗なく受け入れられ、抵抗なく受け入れられることによって力を持つ、つまりそれらの作品の言葉は詩ではなく、小説の一節に属するものとして、あるからである。

「小鳥は輝かしくうたふ」という福田の作品の一行は、伊東静雄の「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」(『わがひとに
與ふる哀歌』昭和十年十月)を想起させる。

耀かしかつた短い日のことを

ひとびとは歌ふ

ひとびとの思ひ出の中で

それらの日は狡く

いい時と場所とをえらんだのだ

ただ一つの沼が世界ぢゆうにひろごり

ひとの目を囚へるいづれもの沼は

それでちつぽけですんだのだ

私はうたはない

短かかつた耀かしい日のことを

寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ

むろん、これも散文形式にすることは可能である。口語自由詩とは散文であるに他ならないから、この作品もまた詩ではなく、小説の一節としてある。けれどもこの作品はそのことを自覚していて、そのことに抵抗するように書かれている。

小鳥は輝かしくうたふ。空はうすい光の影に溶けて、水車のつらゝは陽に燦然と光る。少女の顔が窓から覗いて、うれしさうな子供の声がひびく。(陽が出たよ、陽が出たよ)。とちこめられた胸の底で、新鮮な呼吸がほつほつと甦る。 A

耀かしかつた短い日のことを、ひとびとは歌ふ。ひとびとの思ひ出の中で、それらの日は狡く、いい時と場所とをえらんだのだ。ただ一つの沼が世界ぢゆうにひろがり、ひとの目を囚へるいづれもの沼は、それでちつぽけですんだのだ。私はうたはない、短かかつた耀かしい日のことを。寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ。 B

見られるように、どちらも散文であることに変わりはない。ただAの例が、読むのに抵抗がなく、情景を思い浮かべやすく、共感しやすいのに対して、Bは行分けを廃したにも関わらず意味の取りづらいことに変わりはなく、すらすらとは読み下せない。その言葉は孤独者の独語にも似て、謎めいた表情を浮かべている。明らかに散文としては、Aの方がすぐれている。当然である。彼らは「自由で平明な」言葉を目指したのだから。その目標の実現として詩が

散文となったことに、なんら不審はない。それに対してBの言葉は、ぎくしゃくとしていて、読み手を躓かせる障害が設けられており、透明性を欠いている。散文でありながら、散文であることに抵抗している。「大正」期の詩人たちにとって、口語自由詩は詩の新たな生誕を意味したが、「昭和」の伊東静雄には、口語自由詩が詩の散文化、詩の扼殺に他ならないことが自覚されている。

Aの解釈は不要だろう。Bを解釈してみる。「ただ一つの沼が世界ぢゆうにひろがり」、それはあまりに広範に行き渡っているために人々には気づかれず、「ひとの目を囚へるいづれもの沼は、それでちつぽけですんで」いる。そのため、「耀かしかつた短い日」は「ひとびとの思ひ出の中で」、「沼」に覆われていないような時と場所とを、「狡く、いい時と場所とをえら」んで記憶され、「ひとびと」はそれを歌うことができる。だが「私」は世界中に広がる「ただ一つの沼」に気づいていて、「私」のすべてはその「沼」に覆われているために、「耀かしかつた短い日」をしまっておけるような選ばれるべき時も場所もない。「私」には「耀かしかつた短い日」はあらかじめ失われている。だから「私」は「耀かしかつた短い日」を歌わない。むしろ「私」の記憶するものではなく所有するものではない「耀かしかつた短い日」が「私のけふの日を歌ふ」、「私のけふの日」を、輝かしいものとして自ら歌うのだ。

「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」を考えるには、「わがひとに与ふる哀歌」を参看するのが有効だろう。

太陽は美しく輝き

あるひは 太陽の美しく輝くことを希ひ

手をかたくくみあはせ

しづかに私たちは歩いて行つた
かく誘ふものの何であらうとも
私たちの内の

誘はるる清らかさを私は信ずる
無縁のひとはたとへ

鳥々は恒に変わらず鳴き

草木の囁きは時をわかつたずとするとも

いま私たちは聴く

私たちの意志の姿勢で

それらの無辺な広大の讃歌を

あゝ わがひと

輝くこの日光の中に忍びこんである

音なき空虚を

歴然と見わくる目の発明の

何にならう

如かない 人気ない山に上り

切に希はれた太陽をして

殆ど死した湖の一面に遍照させるのに

「私たち」とは「無縁のひと」は、「輝くこの日光の中に忍びこんである／音なき空虚」に気づくこともなく、「太陽は美しく輝き」「鳥々は恒に変わらず鳴き」「草木の囁きは時をわかつた」とする。それは「ひとの目を囚へるいづれもの沼は、それでちつぽけですんだ」ために、「狡く、いい時と場所とをえらんた」「耀かしかつた短い日のことを、ひとびとは歌ふ」というのと、ほぼ同様の事情である。それに対して「私たち」は、「ただ一つの沼が世界ぢゆうにひろご」っていることに気づくのと同じようにして、「空虚」に気づいてしまった。「空虚」を「歴然と見わくる目の発明」を誇っても、得られるものは虚無でしかない。だが望みはまだある。何か「私たち」を誘っている。「かく誘ふものの何であらうとも／私たちの内の誘はるる清らかさを私は信ずる」がゆえに、「いま私たちは聴く／私たちの意志の姿勢で／それらの無辺な広大の讃歌を」。そして「私」は「わがひと」と、「太陽の美しく輝くことを希ひ」、「切に希はれた太陽をして／殆ど死した湖の一面に遍照させる」ことを願う。

「かく誘ふもの」はもちろんのこと、「私たちの内の誘はるる清らかさ」もまた、「私」とは区別されている。誘うものと誘われるものとの応答を、「私は信じる」。それは「私はうたはない／短かかつた耀かしい日のことを／寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」というのと、同じことを言っている。「誘ふもの」と「誘はるる」ものが、信じられていながら、「私」のものではなく「私」からは区別されているように、「短かかつた耀かしい日」は「私のけふの日を歌ふ」のでありながら、「私」の記憶するものではなく「私」からは区別されている。「傷ついた浪漫派」という朔太郎の評言があるように、「昭和」の詩人・伊東静雄においてもはや詩は素朴には信じられていない。

「輝くこの日光の中に忍びこんでゐる／音なき空虚」によって「殆ど死した湖の一面」とは、口語自由詩という「ただ一つの沼が世界ぢゆうにひろご」って△詩▽の失われた世界を示していると、ここまでのわたしの論の文脈に位置づけることによって、読むことが出来る。「大正」の詩人たちは「太陽は美しく輝」いていと信じ、「耀かしい日」を歌った。そこに、どのような錯誤が、あるいは可能性が、あったのか。

四

自然そのものの本質は何であるか、私はそれを軽々しく断言出来ないが、少くとも大地の上に生ずる草木や空を飛ぶ雲、若しくは日月、或は吹き過ぐる風を見ても、そのいかにも自由で平明であることがわかる。私は自分の感動が強烈であればあるほど自由で平明であり得る。そこに何等の修飾も不必要だ。私の求めるものはありふれた言葉で内容の深いものを示す詩だ、それと反対に言葉だけが強烈で珍奇で、洗ひ落して見れば、平凡な内容の詩は最も低劣な詩だ。私は自然のごとく平明で自由であらうとするためには、(中略)努めて其の感動の泉の如く湧くまでつねに詩作を控へてゐる。(中略)机の上でのみ苦心される詩を私は恥ぢる。

(白鳥省吾「現実と表現」『日本詩人』大正十一年一月)

意味の固定してゐる結果、われ等の心を直接に喚びおこし得ず、そのため生氣ある感銘を与へ得ない古語は、別言すれば唯だひとつ文字といふものを通じて、過去から現在に相伝されてゐる古語は、わたし等の日常眼にしてゐる

る現実世界を、乃至其れ等の心と直ちに交渉する直接世界を、われ等の耳や口等の日常使用の感官のもとに、その指定するものをつねに活現させてある口語に比較し、とくに文学上にこそ現はれざれ、われ等の日常卑近に接してある俗語に比較し、その役を十分に果し得ぬことは、あきらかである。

（福土幸次郎「四月詩壇月評」『日本詩人』大正十一年五月）

日本に自由詩が盛んになり、平明な言葉によつて深い感情と思想とをうたひ、或は人生をうたつたことが、現在の詩壇の隆盛期をつくるものであつた。それが再び言葉といふものばかりに詩を探す時代が来たらばどうなるであらうか。（中略）私はさうした意味で詩を現実の人生に即して生むことを求める。そこに詩の根源がある。感情はこれを高くし、思想はこれを深くするであらう。しかもこの現実面は掘れば掘るほど深い。言葉のトリックによつて生きなくとも、この人生の詩の泉は決して涸れることなく人々に深さを求めてゐる。

（福田正夫「最近の感想」『日本詩人』大正十一年八月）

これらが、詩話会／『日本詩人』の中心に位置する詩人たちの発言である。「自由」で「平明」で「直接」的であれという彼らの主張は実現し、詩は散文となつたが、彼らは、△詩▽の不在を嘆く必要はなかつた。「自然」を前にすれば「感動の泉の如く湧く」のを感じることができたし、「人生の詩の泉は決して涸れること」がなかつた。このような「自然」や「人生」に対する態度が、いわゆる心境小説や私小説に接続するものであることは、容易に推測できる。これに対して萩原朔太郎の見せている姿勢は、異質のものである。前記三者と同じ、大正十一年（一九二二年）のも

のを引く。

果してどこに今日浪漫主義なる感情が存在するか。あれらの人道主義や、民衆主義や、社会主義やに就いて言ふべくは、それはあまりに本質のない浪漫主義である。いかに我等は一つの「雄大なる感情」を絶叫するか。

(中略) 今新しき時代は叫ぶ。我等にまで一切の概念を廃棄せよと。すべてに於て「感情」を復活せよ。(中略) あ何物かの悦ばしき朝ぞや。いかに潑刺たる意志を予感し得るか。遂に遂に説明のできない一種不思議の気分は、今來るべき年を迎へて心に春のごとく時めく。

(「詩壇の新年を迎へて」『日本詩人』大正十一年一月)

思ふに過去の民衆派は、一つの騒々しい「ジャーナリズムの酔心地」であつたかも知れぬ。(中略) 今、彼等は
その求めて居る少数の民衆を発見したであらう。眞のヒューマニチイはどこにあるか。それは誤られたるデモクラシイや、安価で無思想な白樺的人道主義と方角をちがへるであらう。況んや抽象の皮相な感激でなく、眞に具象的なる生活内景にまで、まことの「民衆的精神」を発見するべく反省するであらう。(中略) ブラボオ!
かくて私の囑望と光明とは、あげてこの興味ある詩派——変りつつある民衆派——の未来にかかつて居る。

(「詩壇時言 民衆派の未来主義」『日本詩人』大正十一年九月)

朔太郎は「自然」を前にして「感動の泉の如く湧く」を感じることはなかったし、「人生の詩の泉」を涸らさないためには「一つの「雄大なる感情」を絶叫」しつづけねばならなかった。明らかに前記三者とは異質でありながら、

朔太郎が詩話会／『日本詩人』と行動を共にしたのは、なぜなのか。

蓮實重彦「大正的」言説と批評」（『批評空間2』一九九一・七）は、「大正期」の批評的言説を「一つの同じ言説」の大がかりな反復として捉える視点を、「ひとつの作業仮設として」提示している。蓮實氏によれば、「民衆的傾向」から「デモクラシー」をへて「改造」、「解放」へと向かう「魅力的な標語」の全盛期とみなしうる大正期の言説のある種の楽天的な「明るさ」は、何よりもそれらの言説の抽象性から来ているのであり、具体性を避けようとして陥る饒舌を支える「抽象的な主題」の反復として成立する大正期の「問題」をほぼ集約しうる主題体系として、次の三つが挙げられる。

第一の主題体系は、語の多様な意味における「代行」に関わりを持つ「問題」群である。「天皇機関説」、「民本主義」、「普通選挙運動」、「婦人参政権運動」、「プロレタリア文学」などをめぐる多くの「標語」はいずれもこれにつらなるものである。

第二の主題体系は、なんらかの意味で「普遍」的な価値への信仰と関わりを持つものだ。たとえば「人類」、「世界」といった「問題」がそれにあたり、「文化主義」や「人格主義」といった「標語」、さらに武者小路實篤が口にする「人類の意志」などがその典型だろうし、「改造」、「解放」といった「標語」もそれから必然的に導きだされてくる。

第三の主題体系は、「生命」、「自然」、「美」といった「主体」の位置の曖昧さを際立たせる「問題」群である。「主客合一」、「主客両躰の融会」など、あるいは田山花袋の「観照と実行」がそうであるように、そこでは殆どの二元論的な対立が解消されてしまうだろう。

このように「一つの言説」の大きかりな反復としてある「大正的」な言説は、その本質において、非歴史的であり、非文学的なものたらざるをえないこと、ただ誰もがこぞって「抽象的な主題」と戯れているとき、有島武郎が「代行」を拒み、廣津和郎が「人類」を批判し、柳宗悦が他なる「美」を発見していること、そして「大正期」における「一つの同じ言説」の反復に巻き込まれることなく、明確な対象を設定してその記述と分析を実践し、体系的と呼びうる思考を駆使しえた知的な言説として折口信夫や柳田國男あるいは南方熊楠らの「民俗学」があることを、蓮實氏は指摘している。まことにみごとな抽象であり仮設の提示であるのだが、萩原朔太郎もまたあらゆる「主義」を否定することによって「代行」を拒み、「島国日本か世界日本か」との問いによって「普遍」を批判し、「浄罪詩篇」の挫折に己れが「美」たりえないことを味わわされていたと言い得るだろう。民衆派に同調し得ないはずでありながら、にもかかわらず朔太郎は、「民衆派」に期待しつづけた。北原白秋との深い繋がりがあがりながら、詩話会の分裂脱退騒動に際して、白秋らと行動をとにもせず、室生犀星とともに詩話会に残った。それはなぜか。

五

おそらくそのような姿勢は、『月に吠える』編集の時点で、定まっていた。大正六年六月の『感情』に掲載された「群衆の中を求めて歩く」は、そのことを物語っている。

私はいつも都会を求め

都会のにぎやかな群衆の中に居ることをもとめる

群衆はおほきな感情をもつたひとつの浪のやうなものだ

どこへでも流れてゆくひとつのさかんな意志と愛欲とのぐるうぶだ

ああ ものがなしき春のたそがれどき

都会に入り込みたる建築と建築との日影をもとめ

おほきな群衆の中にもまれてゆくのはどんなに楽しいことか

みよこの群のながれてゆくありさまを

ひとつの浪はひとつの浪の上にかさなり

浪はかざりなき日影をつくり、日影はゆるぎつつひろがりすすむ

ひとつのひとりひとりにもつ憂ひと悲しみはみなその日影に消えてあとかたもなし

ああ なんといふやすらかな心で私はこの道をも歩みすぎ行くことか

ああ このおほひなる愛と無心のたのしき日影

たのしき浪のあなたにつれられてゆく心もちは涙ぐましくなるやうだ

うらがなしい春の日のたそがれどき

このひとびとの群は建築と建築との軒をおよぎて

どこへどうして流れゆかふとするのか

私のかなしい憂愁をつつんであるひとつの大きな地上の日かげ

ただよふ無心の浪のながれ

ああ どこまでも、どこまでも、この群衆の浪の中をもまれて行きたい

浪の行方は地平にけぶる

ただひとつの悲しい方角をもとめるために。

「おほきな感情をもつたひとつの浪のやうな」「群衆」、「どこへでも流れてゆくひとつのさかんな意志と愛欲とのぐらうぶ」に、『月に吠える』以後の朔太郎は希望を繋ごうとした。最終行の「ただひとつの悲しい方角をもとめるために。」は、詩集『青猫』（大正十二年一月）収録に際して、「ひとつの 　ただひとつの「方角」ばかりさしてながれ行かうよ。」と改められている。先に引用した「詩壇時言 民衆派の未来主義」に、「真のヒューマニチイはどこにあるか。それは誤られたるデモクラシイや、安価で無思想な白樺的人道主義と方角をちがへるであらう」とあった。朔太郎はどのような「方角」を願っていたのだろうか。

有馬学『日本の近代4 「国際化」の中の帝国日本』（中央公論新社、一九九九）は、いわゆる「大正デモクラシー」が、「後世の価値観で汚染されている度合いが大きい」と指摘している。同書に引用されている当時の諸家の発言に、次のようなものがある。

日本は明かに欧州大戦に仲間入りした訳でありまして、其仲間入りしたのは単に帝国自身の利益を防護する為ばかりではなく、聯合諸国の利益は勿論、人類全体の利益をも防護する為であります。即ち此残虐なる戦争に於

て、正義と権利とをして終局の勝利を得せしめ、戦後に於きまして世界をして真正なる平和の幸福を受けさせねばなりません。

(寺内閣外相議會答弁。一九一七・一)

世界列強の政治の根本導調が欧州戦乱の影響を受けて其在来の主潮に甚しき動揺と混乱とを来しつつある事は、既に疑を挟む余地が無い。而して、最近、世界各国の政治界を支配する―否支配せんとする時代精神は云う迄もなく政治の平民化、民衆化である。

(尾崎行雄「黎明時代に生きて」一九一七・十一)

平和問題の我国に波及するもの枚挙に遑あらざるべし。されど殊に注意すべきは(中略)無職労働者の増加是也。彼らは米一揆の経験によりて妙な味を占め得たり。次いで来るものは左なきだに滔々として攻め入りつつある民主思想が、独逸の民主化と共に一大潮流を作つて、白浪滔天の勢を以て押し寄せ来ることは是也。

(宮崎滔天 「東京より」一九一八・十一)

今日世界の強大なる国家にして尚お依然として制限選挙制を維持するものは、実に我日本の一国残存するのみである。／今日は世界列強の大勢に対応して落後者たらざる為め、国家存立発展の要件として政治上の総動員たる普通選挙の実行を必要とするのである。

(松田源治(政友会)「普通選挙実行に就て」一九一九・十一)

「普選はまさしく世界大戦の産物であり、戦後ナショナルリズムの表現形式だったのである」と、有馬氏は指摘して

いる。見落とせないのは、政府側の議会答弁に、「人類全体の利益」「正義と権利」「真正なる平和の幸福」などの言葉が使われていることである。そのような理想は、「世界の大勢」（この言葉が当時の諸家の発言にしばしば見られることを、有馬氏は指摘している）であった。それは敗戦国ドイツの「民主化」、そして「国際連盟」の発足に際して掲げられた理想でもあっただろう。

今次の戦争の結果従前支配したる国の統治を離れたる植民地及領土にして、近代世界の激甚なる生存競争状態の下に未だ自立し得ざる人民の居住するものに対しては、該人民の福祉及発達を計るは文明の神聖なる使命なること、及其の使命遂行の保障は本規約中に之を包容することの主義を適用す。（委任統治に関する国際連盟規約・第二十二条）

かつての植民地は「文明の神聖なる使命」によって、委任統治領となる。「最早公然と自分の利益の為に領土を併合することは公言出来なくなり、表面だけでも土民の安寧幸福を目的に統治しなければならなくなったのである」（柳田国男「国際連盟の発達」一九二二・三。『日本の近代4』による）。蓮實氏の指摘する「大正」期の言説の「抽象性」が、柳田の言う「表面」に対応するものであることは、ほぼ確実であろう。「自分の利益の為に」というエゴイズムと、「安寧幸福を目的に」という「表面」との葛藤が、そこには見失われている。「大正」期の詩や詩評の無葛藤と、口語自由詩による詩の散文化とは、照応している。

有馬学『日本の近代4』の指摘で、さらに重要と思われるのは、「大衆の発見と社会の発見」である。

一九二〇年代は、戦前の日本の中で国家的なものの価値が最も後退した、もしくは相対化された時代である。のちにみるように、多くの人々が国家も社会の一部にすぎないと考えていた。国家ではなく社会こそが、新鮮な価値意識の対象として、しかも確かな手応えをもって彼らの目の前にその姿をあらわしていた。彼らにとって意味をもつのは、国家や国家の政治ではなく、大衆の日常生活がその中にあるような社会である。

「のちにみるように」とあるのは、「国家もほかのさまざまな社会集団の一種であるという立場から、国家主権の絶対的な優位性を否定しようとする」「多元的国家論」の隆盛を指している。その隆盛と「同時に国家における執行権の強化という世界的方向があらわれはじめる」のではあるけれども、しかし「人間らしい暮らしがしたいというありふれた欲求が、社会の根源的な課題をなすという言説が、このとき成立したのである」と、有馬氏は指摘する。詩話会／『日本詩人』の背景に、そのような社会の動向があった。先の福田正夫「最近の感想」に、「私はさうした意味で詩を現実の人生に即して生むことを求める。そこに詩の根源がある」とあったことを思い出そう。言ってみれば、人間らしい暮らしがしたいというありふれた欲求が、詩の根源的な課題をなすという言説が、このとき成立したのである。「国家や国家の政治ではなく、大衆の日常生活がその中にあるような社会」において生み出される詩、「笑つて／春の日を楽しんだ」り、「新鮮な呼吸がほつほつと甦る」悦びを味わうような詩が、そこに誕生した。口語自由詩という形式と照応するこの地点に、詩話会／『日本詩人』そして「大正」詩の、正と負とがある。

問題は「人間らしい暮らし」という、その「人間」の内実にあるだろう。先の「詩壇時言 民衆派の未来主義」に朔太郎は、「まことの「民衆精神」と記していた。「真のヒューマニチイはどこにあるか。それは誤られたるデモクラシイや、安価で無思想な白樺的人道主義と方角をちがへるであらう」とも。「まことの「民衆精神」「真のヒューマニチイ」とは、彼の夢想する「近代的自由主義」を奉ずるものであるだろう。すでにわたしたちは「昭和」の『水島』（昭和九年六月）における文語詩への「退却」による絶望の歌を知っている。そこに至る道程にどのような錯誤があり、あるいは可能性があったのか。少なくとも「大正」の時点で、朔太郎は「悦ばしき朝」（前引「詩壇の新年を迎へて」）を信じていた。いや、信じようとしていた。それはどのような「朝」であったのか。

しのめきたるまへ

家家の戸の外で鳴いてゐるのは鶏です

声をばながくふるはして

さむしい田舎の自然からよびあげる母の声です

とをてくう、とをるもう、とをるもう。

朝のつめたい臥床の中で

私のたましひは羽ばたきをする

この雨戸の隙間からみれば

よもの景色はあかるくかがやいてゐるやうです
されどもしのめきたるまへ

わたしの臥床にしびこむひとつの憂愁
けぶれる木木の梢をこえ

遠い田舎の自然からよびあげる鶏のこゑです
とをてくう、とをるもう、とをるもう。

(「鶏」第一・二連。『青猫』)

付記 この考察は、『日本詩人』を読む研究会における参加者の報告ならびに議論に負うところが大きいことを、
謝意とともに記しておきたい。

(本学教授)